

## 地域連携によるアサリを増やすための干潟調査

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2025-07-29 キーワード: 作成者: 崎山, 一孝 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2015063">https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2015063</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



フィールド調査特集

# 地域連携によるアサリを増やすための干潟調査

さきやま かずたか  
 崎山 一孝

瀬戸内海では、アサリの漁獲量は広島県が最も多く、その中では県東部の松永湾（図1）と周辺干潟（尾道市、福山市西部）が県全体の漁獲量の1/3を占めています。また、この海域では、広島県の指導のもとに尾道市や関係漁協、地域住民によるアサリ資源の保護や増殖のために様々な活動が実践されています。瀬戸内海区水産研究所海産無脊椎動物研究センターと生産環境部では、これらの活動をバックアップするために、関係機関と共同でアサリ資源を増やすことを目的としたフィールド調査を行っています（図2）。この調査は漁業者や地域の方が継続して取り組むことが重要なので、高価な機器や特殊技術のいらない方法で行っています。以下に、実際に行ったフィールド調査の概要を紹介します。

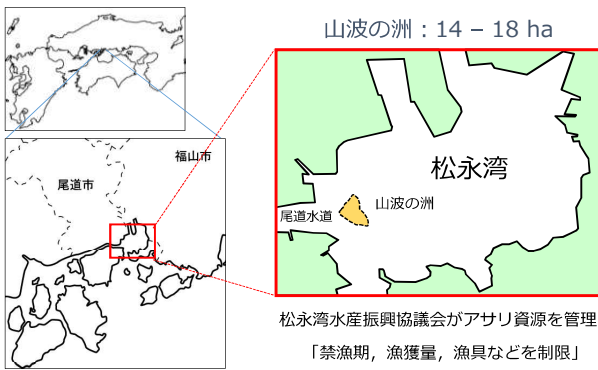


図1 調査対象とした広島県東部海域

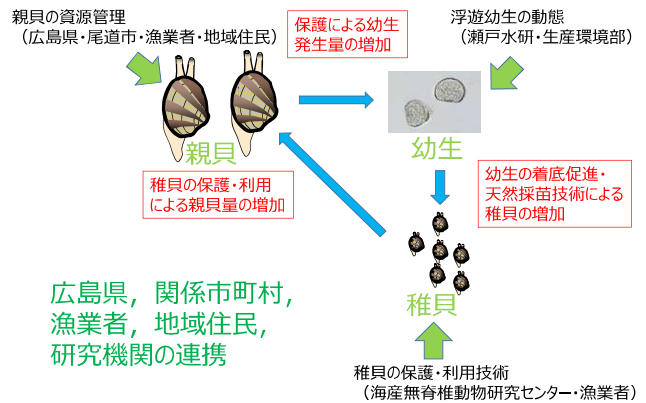


図2 広島県東部におけるアサリ資源増大に向けた試験調査の体制

## 調査干潟の選定

干潟域はアサリだけの漁場ではなく、様々な魚介類を対象とした漁業が営まれています。そのため、アサリを増やすための構造物の設置や、干潟の環境改善のための耕耘等が可能な場所を地元の漁協や漁業者の皆さんに選定していただき、その干潟の中から調査に適した場所を選定しました。

## アサリを増やすための干潟調査

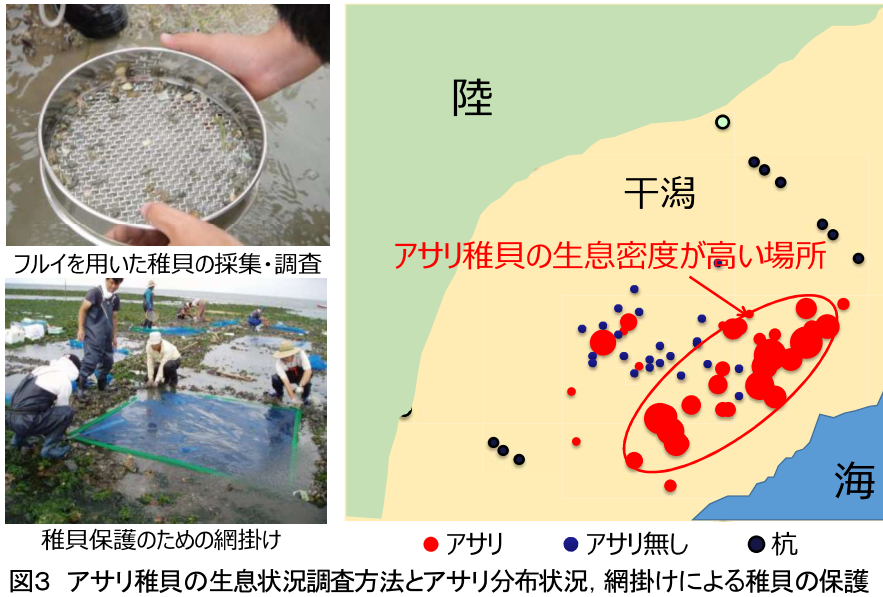
### (1) 稚貝生息場所の調査

アサリは生まれてから2~3週間は海水中を浮遊しています（浮遊幼生）。その後、干潟に着底し（着底稚貝）、その場所で大きく成長しアサリ漁場を形成します。しかし、同じ干潟内でも、地盤の勾配、砂の大きさ（粒度）、波の当たり方や潮の流れ等が場所によって異なるので、アサリの集まりやすい場所、生き残りに適した場所に偏りが表れます。そこで、アサリを増やすため

の最初の作業として、稚貝が生息する場所を見つける調査を行いました。この調査では、塩化ビニールパイプの筒（直径10cm、長さ10cm）を用いて干潟の砂を採取し、ふるい（目合い2mm）にかけてアサリ稚貝を回収しました。回収した稚貝の個数を計数して、その場所のアサリの密度（1平方メートルに生息する稚貝の個数）を推定しました。この調査を干潟内複数個所で実施することにより、アサリの生息密度が高い場所がわかります（図3）。

### (2) 稚貝を保護するための調査

アサリ稚貝の生残率を高めるためには、稚貝が他の生物に食べられたり、波や潮流で流されたりしないように、稚貝の生息する場所に網をかぶせる方法（被せ網）に効果があるとされています。そこで、その方法に本当に効果があるかどうか、実際に稚貝の生息する場所に網を被せてアサリの成長と生残状況を調査しました。この時の調査方法は稚貝の調査と同じです。



稚貝の生息場所に網を被せて1年10カ月後、稚貝調査と同じ方法で網の下のアサリを採取し、生息密度と大きさを調査しました。また、網掛けの効果を見るために、網の外でも同じ方法で調査を行いました。その結果、調査対象とした干潟では、網の中では平均殻長約25~30mmのアサリが最大5.4kg/m<sup>2</sup>の密度で生息していることがわかりました(図4)。一方、網の外では、大型のアサリが少なく生息量は1kg/m<sup>2</sup>以下でした。これらの調査結果から、稚貝の生息場所を見つけ、網を被せる方法により稚貝を保護し、大型のアサリを育てることが可能であることが明らかとなりました。

### 今後の干潟調査の進め方

アサリ漁場の干潟の環境は海域により異なり、年ごとと季節ごとに大きく変化するので、長期にわたって調査を続けることが重要です。様々な機器を使用して干潟の環境やアサリの生息状況を詳細に調査することは必要ですが、予算や労力の問題があるので、このような調査を長期間継続することは困難です。今回紹介した干潟調査を漁業者、地元住民の方と継続的に取り組み、重要な案件については水産研究所と関係機関が協力して、詳細な調査研究を実施することで、対象海域のアサリ資源の回復を図っていきたいと考えています。

(海産無脊椎動物研究センター 貝類グループ長)

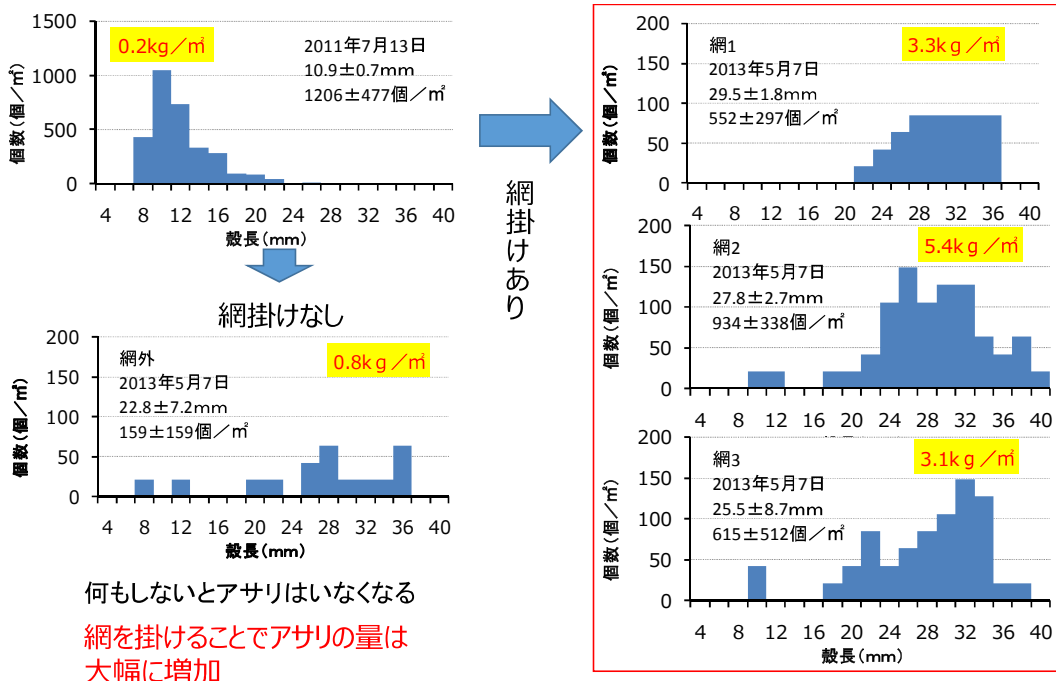


図4 被せ網の有無によるアサリの生息状況の比較